

# 子どものタイプA行動パターンに関する研究

大 声 治

倉敷芸術科学大学教養学部

(1996年9月30日 受理)

## (1) 問題の所在

狭心症や心筋梗塞といった虚血性心疾患 (coronary heart disease: 以下, CHDと略す) は, わが国など先進諸国の死亡の原因疾患として常にその割合の上位を占めている。タイプA行動パターン (Type A Behavior Pattern: 以下, タイプAと称する) とは, このCHDの危険因子として, M.FriedmanやR.H.Rosenmanらによって提唱された概念である。Friedman & Rosenman (1974) によれば, 高血圧症, 高コレステロール症といった一般的によく知られているCHDの危険因子では, 発症の原因のすべてを説明できないという。彼らは, その他の要因を探った結果, CHDの発症に寄与する心理-社会的な危険因子としてタイプAを見いだしたのである。タイプAは, ① 時間的な切迫感 (sense of time urgency), ② 攻撃性と敵意 (hostility and aggression) ③ 競争性 (competitiveness) や達成に対する過剰な傾向 (overindulgence in achievement) ④ 気短さ (impatience) などを主要な特徴とする。これらの特徴をもったタイプAを示す者 (以下, タイプA者とする。) は, 日常生活の中でストレス状態に陥りやすく, そのストレスがCHDの原因につながっているという。タイプAとCHDとの因果関係は必ずしも十分明らかにされたわけではないが, 前田 (1990) によれば, タイプA者はストレス負荷時の交感神経系の易興奮性が認められ, また, 冠動脈硬化症の重症者が多いことなどがその有力な手がかりとして考えられるという。また, 最近では, タイプA者の交感神経系の易興奮性が心拍の増加を招き, それが動脈硬化症の進行につながっているという説も出されている (詳細は, 木村, 1995を参照)。

本稿は, このタイプAに関する研究のうちでも, ここ20年ほど盛んに行われるようになってきた子どもを対象とした研究に焦点を当てる。まず, はじめに断っておくが, 本稿で子どもと称するのは, 成人以前の発達段階, すなわち幼児期 (early childhood), 児童期 (childhood), 青年期 (adolescence) に属する者をさす。また, 年齢でいえば概ね18歳以下という範囲である。つまり, 大学生を対象とした研究は一応成人に関する研究として扱う。ただし, 一部, この範囲を越えた研究も必要に応じて引用することもあるので, あらかじめ申し添えておく。

ところで, タイプAとは先に述べたようにCHDの危険因子として知られる一群の行動傾向をさす。従って, 一般的に考えてタイプAが原因で健康上の問題が生じてくるのはCHDなどの成人病の好発年齢となる中年期に達してからである。にもかかわらず, CHDの発症とは比

較的関連の薄い成人以前の時期を対象とした研究が多数行われるようになったのは、何故であろうか。

不思議なことだが、大部分の研究は子どものタイプAの研究が行われるようになった理由を、必ずしも、明確に整理し説明していない。むしろ、子どものタイプAの研究がなされるようになったのは、子どもに成人のタイプAとほぼ同じような行動傾向が観察できるという研究者の直感的な理解に基づいているというのが実状のようだ。

そして、たいていの研究者は、成人に見られるタイプAと同じ、ないしは、明らかにその前段階とみられる状態が子どもにも存在すること、そして、子どものタイプAも、成人のタイプAと同様に研究される意味があるという前提を特に吟味することなく受け入れている。しかし、この前提はあくまで仮説に過ぎず、この仮説が確かなものかどうか十分な検討がなされているとはいえない。むしろ、その確認がなされてこそ、子どものタイプAの研究の意義を評価することができるはずである。

そこで、本稿では、近年実施された諸研究を展望することで、上に述べた仮説を検討し、子どものタイプAの研究の意義を評価してみたい。

ところで、この仮説を検討するために、本稿では以下のような手順を踏む。まず、子どものタイプAの研究が成人の研究と同様に意味を持つものかどうかを確かめるため、次のⅠからⅢの3つの作業仮説をたてそれらを順に吟味する。

Ⅰ。「成人にみられるタイプAと同じ行動傾向が子どもにおいてもみられる。または、そうでなくとも、明らかにその前段階と見られる状態が子どもにおいても存在するといえる。」

Ⅱ。「上記の仮説Ⅰにおいて確認された子どものタイプA、ないしは、その前段階とみられる状態が、成人に達するまで維持、強化、あるいは、変容されながら持続し成人のタイプAに連続している。」

Ⅲ。「子どもにみられるタイプAが、成人のように直接に心疾患の発症の契機とならないまでも、将来の心疾患の発症につながるような何らかの心臓血管系の反応と関連する。」

上記の作業仮説のうちⅠおよびⅡについては、必ず確認される必要があるであろう。そうでなければ成人期以降にCHDの危険因子となるタイプAの研究を子どもにおいて行う意義がほとんどなくなってしまふからである。Ⅲについては、タイプAとCHDの関係が現実問題として生じてくるのは成人以降であることを考えれば、もし、ⅠおよびⅡが十分に確認されれば絶対に必要な条件とはいえないかもしれない。しかし、やはり、確認できればCHDの危険因子としての子どものタイプAの研究の妥当性をより確かなものにできる。以上、3つの作業仮説が確認されれば、ひとまずは子どものタイプAの研究を行う意義が確認される。

本稿の前半は以上のⅠからⅢの作業仮説の検討にあてられるが、後半では、前半の作業において裏付けられた子どものタイプAの研究の中心的テーマともいべきタイプAの起源と発達

に関する議論を概観してみたい。すなわち、子どもに見られるタイプA、あるいは、その前段階に相当する状態の起源がいかなるものなのか、遺伝的に規定されたものなのか、あるいは、環境の影響によるものなのか。さらにはタイプAの発達の過程はどのようなものなのかといった問題である。そして、最後に教育心理学における子どものタイプAの研究の意義を若干考察し、今後の研究の方向を探ってみたい。

## (2) 子どもにも成人と同じようなタイプAが見られるのか。

まず、先に掲げた作業仮説Iを検討してみる。

### 1. 行動や心理メカニズムの類似性を基準にする立場

子どものタイプAに関する研究のなかでもっとも初期の研究に属するBortner, Rosenman, & Friedman (1970)の研究では、11歳以上の平均15歳の子どもにできるだけ早く文字を書くテストや決められた短い時間内に与えられた課題をこなすテストなど5つのテストを実施し、これらのテストの得点をタイプAの指標とみなしている。また、Butensky, Faralli, Heebner, & Waldron (1976)の児童、青年を対象とした研究では、成人のタイプAの尺度として著明なJenkins Activity Surbey (Jenkins, Zyzanski, & Rosenman, 1971: 以下, JASと略す)などの内容を参考にインタビューを構成し、それを実施することでタイプAが測定できたとしている。これらの研究では、成人のタイプAの特徴と符合する項目やテストにおいて一定程度の得点を得る子どもが研究の対象者の中にいれば、それで、子どもにも成人のタイプAと同様の行動傾向がみられるとみなしている。つまり、子どもにタイプAがみられる根拠を、表面的な行動の類似性に求めているのである。

一方、そのような表面的な行動の類似性にとどまらず、行動の背後にある心理的なメカニズムの類似性も含めて子どもにタイプAが存することを検証する試みが、K.A. Matthewsらによって行われるようになった。

Matthewsらによって行われた研究は、子どもの中でも児童をその中心に据えている。

たとえば、Matthews (1979)は、4年生、5年生の男子児童と、対照群として男子大学生を対象として以下のような実験を行った。まず、児童は子供用のタイプA測定尺度Matthews Youth Test for Health (以下, MYTHと略す)\*で、大学生はJASによってそれぞれタイプA、タイプB\*\*に分類した。そして、反応することで強化が与えられる仕組みになっているボタン押し課題が実施された。その結果、ボタンを押すことによって結果をコントロールできることが明白で被験者に驚異を与えない課題条件においては、タイプA者、タイプB者ともとくに反応の差がなかったが、反応と結果の随伴性の認知が困難で被験者にとって脅威的な課題条件では、大学生、児童ともタイプA者の反応の頻度が高まっていた。Glass (1977)は、タイプA者にはコントロール不可能なストレスに対して過剰なコントロールの回復、獲得を目指そうとする特徴的な心理的メカニズムがあり敵意や攻撃性といった行動はこのメカニズムから説明できると考えているが、この実験はこの理論に沿って行われたものである。Matthewsはこの実験での脅

威的な事態に対するタイプA者の反応の高まりをタイプA者が見せる攻撃性と同様のものと考えた。そして、児童のタイプA者と大学生のタイプA者のそれぞれにみられる攻撃性の説明にGlass (1977) の考えた心理的メカニズムが等しく適用できれば、子どもにも成人と同じタイプAが存するとみなしたのである。

このように児童と成人のタイプA者にもみられる行動の背後にある心理的なメカニズムの類似から子どものタイプAの存在を確認しようとした研究として、他にMatthews & Volkin (1981), Stamps (1988), Weidner & Matthews (1978) などがある。

前述したようにMatthewsらの研究は、おおむね、児童をその対象にしている。従って、これらの研究結果をみる限り、すでに児童期では成人のタイプAと同様の心理的メカニズムをもった行動傾向が存在しているとみなせる。それならば、児童よりさらに一段階の前の幼児期では、どうであろうか。

幼児期にタイプAと同様の行動がみられるかどうかを検討した研究としては、Corrigan & Moskowitz (1983), Lundberg (1983), Vega-Lahr & Field (1986) などの研究がある。

このうち、最も組織的に行われたVega-Lahr & Field (1986) の研究を紹介する。この研究の被験者は幼児48名 (男子24名, 女子24名) である。被験者はMYTHによってタイプAあるいはタイプBに分類された。そして、自由遊技場面、および、競争的な課題場面での行動が観察、記録された。その結果、タイプAの幼児は、自由遊技場面でボボドールとよばれる人形を殴るなどの攻撃的な行動が多くみられた。また、タイプAの幼児は競争的な課題場面である自動車レースや、積み木で高い建物を組み立てるゲームでも遂行成績がよかった。つまり、競争性や強い達成に対する傾向などが実際に確認されたというのである。Vega-Lahr & Fieldは、Matthewsらのように心理的なメカニズムのモデルを提示し、それに結果をあてはめるという作業は必ずしも積極的に行っていない。しかし、攻撃性、競争性、強い達成傾向などのタイプAの主要な行動特徴を児童を対象として実験室で生起させたことは評価できる。

以上ここまでで紹介した研究は、心理的メカニズムを重視するかどうかという違いはみられるものの、子どものタイプAの存在をその行動特徴から検討し、概ね肯定的な結果を得たものといえよう。

## 2. 根底にある気質に注目する立場

これに対し、Steinberg (1985) やMacEvoy, Lambert, Karlbeg, Karlberg, Klakenberg-Larsson, & Klakenberg (1988) は、幼児や児童に成人のタイプA者にみられる行動特徴とほぼ対応する行動がみられるとする諸研究に疑問を抱いた。幼児期、児童期のタイプAの研究は、単に成人のタイプAと似ている行動やその心理的メカニズムを見いだすだけでは意味がなく、むしろ、基底となる気質 (temperment) の中に後にタイプAが発達する萌芽を見つけるべきであると考えたのである。

このうちSteinberg (1985) は、すでに別の目的で継続して実施されていた縦断的研究の21歳

になる被験者に協力を依頼し、数種のタイプAの測定尺度を参考に構成したインタビューを実施し成人期のタイプAを測定した。そして、その被験者が3歳、4歳時に母親によって測定された気質の尺度との関係が検討された。測定された気質は活動レベル (activity level)、適応性 (adaptability) など9つにのぼる。その結果、21歳時点でのタイプA得点の分散の20%程度が3歳、4歳時の気質から説明できることを見いだした。なお、後にSteinberg (1986; 1988) は、同じ縦断的研究の中の7歳、16歳の時点での性格特性に関する結果からタイプAに相当する部分を抜き出し、21歳時点で測定したタイプAとの関係を検討した。このうち16歳と21歳のタイプAの得点には有意な相関が見られたが、7歳と16歳のタイプAの得点の相関は有意でなかった。そこで、Steinberg (1988) はこれらの結果を総合し、タイプAは、幼児、児童の段階ではその基底となる気質という形では存在しているものの実際に顕在的な行動とし発現しているとは断定できないとした。一般的にタイプAとされるような行動傾向は、児童期を通じて気質と環境との相互作用から発達するものと考えたのである。

ただ、後述するようにSteinberg (1986; 1988) の縦断的データは方法上の問題を有しているので、この説は完全に確かなものとはいえない。しかし、児童、幼児のタイプAを気質レベルでのみ認めるという立場は、とくにタイプAの発達を考える上で参考になると思われる。

### 3. この節のまとめ

以上のように、子ども、なかでも、幼児、児童にタイプAがみられるかどうかについては、ほぼ対応する行動がみられるとする立場と、その起源となる気質が存在するという立場の2つがあり、現段階ではその当否は確定していない。とはいえ、子どものタイプAに相当、ないしは、関連する概念が全く存在しないという積極的な主張がほとんど見あたらないことを考えれば、仮説Iは緩やかな意味で確認されたといえる。

#### (3) 子どもの時期に見られたタイプAは成人のタイプAと連続的なものといえるか。

次に、作業仮説IIを検討してみる。

子どものタイプAと成人のタイプAの連続性を確認するためには幼児、児童期から成人に至るおよそ10年を越す縦断的研究が必要となる。長い時間を要するこの種の研究は、その重要さに反して、数少ない。

まず、Bergman & Magnusson (1986) は、13歳から27歳に至る縦断的研究の結果を発表した。実は、この研究はスウェーデンの子どもの対象として行われたパーソナリティの発達に関する縦断的研究の一部であり、本来、タイプAの研究のために行われたものではない。従って、対象者が27歳の時点ではLundberg (1980) のタイプAスケールが実施されたものの、13歳の時点ではタイプAの研究を行う意図がなかったためタイプAそのものを測定するスケールは実施されていない。しかし、Bergman & Magnussonは13歳の時点で測定された様々な性格特性、行動特性のなかから攻撃性、過剰な野心 (overambition) などの4つのタイプAと類似する尺度得点

を取り出し、これらと27歳時に測定されたタイプA尺度の得点との間で相関係数を算出した。13歳で測定された4つの尺度得点の合計値と27歳でのタイプA尺度の得点との相関係数は男子で.41 ( $P < .01$ ), 女子で.36 ( $P < .05$ )であり、思春期前期から成人に至るタイプAの安定性が確認されたと結論づけられた。

ほぼ、同じ頃、先に(2) - 2で紹介したSteinberg (1986; 1988)の縦断的データが発表された。この研究は子どもが7歳、16歳、21歳の3つの時点でインタビューを行い得たデータによっている。結果は、7歳時と16歳時のタイプAの得点間の相関は有意でなく、16歳時と21歳時では有意であった(男子.48  $P < .005$ , 女子, .37  $P < .05$ )。先に述べたようにSteinbergはこの結果から7歳の段階ではタイプAはまだ気質レベルにとどまり実際の行動として発現していないと考えた。しかし、この研究ではインタビューの対象者が7歳時では担任の教師、16歳、21歳の時点では本人であり、すべてが同一ではないという問題を有していた。したがって、7歳時と16歳時の間で有意な相関が得られなかった理由も、実は、測定の信頼性の問題に求められる可能性を残していた。

また、Visintainer & Matthews (1987)は、幼児と3つの学年の児童(2年生、4年生、6年生)を対象として5年間において教師評定によるMYTHを実施した。4年生と6年生を一緒に集計し、2時点でのMYTH得点の相関係数を算出したところ、男子で.38、女子で.33とともに有意な値が得られている。なお、相関係数が.4未満でとどまっているのは2つの時点でMYTHを評定した教師が異なるため、それを考慮すれば児童期から思春期に至るタイプAの連続性は認められるという。

次に、Keltikangas-Jarvinen (1990)はそれまでの縦断的研究の問題点を整理し、その解決をめざした研究を発表した。Keltikangas-Jarvinenは、6歳、9歳、および、12歳の児童を対象として母親の評定によるMYTHを実施し、さらに3年後に同じく母親によるMYTHを再度実施した。これによって、6歳から15歳に至る各年齢で、MYTHというタイプAの測定を目的とした同一尺度で、しかも、母親という同一の評定者によるデータを得ることができたのである。結果は、6歳時と9歳時のMYTH得点の相関係数が男子で.50、女子で.58、9歳時と12歳時の相関係数が男子で.55、女子で.57、そして、12歳時から15歳時の相関係数が男子で.49、女子で.48(いずれも、 $P < .001$ )であり、児童期から青年期に至るタイプAの連続性が確認されたと結論づけられた。

Keltikangas-Jarvinenの研究は、年齢の上限が15歳にとどまり、また、3つの異なるコーホートを3年間追跡しただけで同一対象者が児童から青年に至るまでを追跡したわけではない、といった問題点も残るが、現状ではもっとも信頼できる結果といえよう。

以上のように、子どものタイプAと成人のタイプAの連続性を示す根拠は、その実証は万全とはいえないまでも、概ね確認されつつあるといったところである。

#### (4) 子どものタイプAと心臓血管系の反応

さて、作業仮説Ⅲについてはどうであろうか。

(1) で述べたように心臓血管系（特に心拍）の反応はCHDの発症メカニズムと密接に関係しており、成人ではタイプAと心臓血管系の関係を明らかにすることはCHDの危険因子としてのタイプAの意味を裏付けるものとして欠かせない。そのため成人を対象としてタイプAと心臓血管系の反応の関係を検討した研究が多数行われた（詳細は、Harbin, 1989を参照）。そして、これと対応するように子どもにおけるタイプAと心臓血管系の関係を検討する研究も行われるようになった。

さて、子どもを対象としてタイプAと心臓血管系の反応との関係を扱った研究は、その多くが暗算課題や競争的なテレビゲームといったストレスとなる負荷を与えた時の血圧や心拍数の変化を測定し、タイプAとの関連を検討している。成人を対象とした研究の多くが、ストレス負荷時のタイプA者の血圧の上昇や心拍数の増加を報告しており（詳細は、Harbin, 1989を参照）、それらを子どもにも再現しようとしたのである。まず、負荷を与えた際の血圧の上昇を報告している研究として、Brown, & Tanner (1988; 1990), Lawler, Allen, Critcher, & Standard (1981), Lundberg (1983), Matthews, & Jennings (1984), Siegel, Matthews, & Leitch (1983), Southard, Coates, Kolodner, Parker, Padgett, & Kennedy (1986), Spiga (1986) などの研究が知られている。一方、タイプAと血圧の上昇の関係を認めないとしている研究はMatthews, Manuck, & Saab (1986), Murray, Blake, Prineas, & Gillum (1985) の研究くらいでその数は少ない。ただ、McCann, & Matthews (1988) のようにタイプA者の中でも高血圧症の親をもつ子どもだけがストレス負荷時の血圧の上昇が認められるとしている場合や、Lundberg, Rasch, & Westermark (1991) のように負荷を与える課題によって血圧の変化がある場合とない場合の双方を報告している場合もある。

つぎに、ストレス負荷時の心拍数の増加とタイプAの関連についてであるが、Lawler, et al. (1981), Matthews, & Jennings (1984) などの研究では関連を認めている。しかし、Brown, & Tanner (1988), Lundberg (1983), Matthews, Manuck, & Saab (1986), Murray, et al. (1985) などの研究では心拍とタイプAの関連には懐疑的である。また、Sharpley, James, & Mavroudis (1993) の研究では14歳の被験者ではストレス負荷時のタイプAと心拍との関連がみられたものの17歳では同じ関係は認められず、複雑である。

さて、負荷を与えた場合のタイプAと心臓血管系の関係を見ると、心拍数と血圧の2つの指標のうち血圧の反応を報告する研究が多く認められる。ただ、この傾向は必ずしも成人を対象とした研究ではみられないようである (Harbin, 1989)。ところが、なぜ子どもにおいてタイプAと心拍の関係より血圧の関係が明瞭なのかについては、どの論文にもほとんど述べられていない。とはいえ、血圧の反応も心拍と同様ストレス負荷時に賦活される交感神経系の支配下にあることを考えれば、子どもにおいてもタイプA者はストレス負荷時に交感神経系の賦活が起りやすいということは確かであろう。

### (5) 3つの作業仮説についてのまとめ

ここまで展覧した諸研究の結果から以下のようなことがいえるであろう。すなわち、子どもにも成人のタイプAあるいは、それと類似した状態が存在し（作業仮説Ⅰ）、それが、成人期のタイプAと連続性をもっている可能性があることが確かめられた（作業仮説Ⅱ）。また、タイプAと心臓血管系の関連は、十分とはいえないまでも、子どもにおいてもみとめられるようであった（作業仮説Ⅲ）。すなわち、細部での異同はあるものの冒頭に掲げた3つの作業仮説はほぼその妥当性が確認され、子どもを対象としたタイプAの研究を行うことの意義が認められた。

以上で、子どものタイプAの研究の妥当性を吟味する作業はひとまず終了し、後半に移ることにする。

### (6) タイプAの起源、そして、発達について

#### 1. 遺伝か環境か

まず、タイプAの起源が遺伝要因と環境要因のいずれに求められるかを検討してみたい。この種の研究は、通常、双生児法が用いられるが、タイプAの研究でもその例にもれず双生児の研究が行われた。

Matthews & Kranz (1976) は、大学生の一卵性双生児35組、二卵性双生児21組を対象にして、JASを実施した。その結果、一卵性双生児では有意な相関が得られたが、二卵性双生児では無相関であった。この結果から、Matthews & Kranzは、タイプAの発現における遺伝的影響の大きさを読みとったが、この研究はサンプルが少ないうえ、遺伝率の統計的な検討が十分でなく問題を残すことになった。

Rahe, Hervig, & Rosenman (1978) は、成人に達した双生児を対象として、成人のタイプAの測定に用いられていた構造的面接 (Structured Interview : Rosenman, 1978 : 以下、SIと略す) と4つの自己評定法による質問紙を実施した。そして、いわゆる遺伝率を算出したところ、SIの遺伝率は有意ではなく、4つの質問紙のうち3つの測定値の遺伝率が有意となる結果が得られた。

Matthews, Rosenman, Dembroski, Harris, MacDougall (1984) の研究では、成人の双生児を対象としてSIによって得られたデータが分析されたが、ここでは、SIを合計得点で用いずいくつかの下位尺度に分けて分析した。その結果、声の大きさ、潜在的な敵意、インタビューの主導権を握ろうとする傾向などの下位尺度で遺伝率が有意となったが、その他の仕事に対する熱心さ、責任感、食べたり、歩いたりするのが早いことなどの尺度では遺伝率は有意にはならなかった。

Carmelli, Rosenman, Chesney, Fabsitz, Lee & Borhani (1988) の研究では、成人の双生児を対象としてSIのほか3つの自己評定を実施して遺伝率を評価した。この研究ではSIは合計点を用いたために遺伝性は認められなかったが、他の自己評定尺度のなかでは気質を測定する項目の中の活動のペースやスピード、行動の強烈さなどで遺伝率が有意になった。



なお、ほぼ同じ頃Meinnger, Hayman, Coates, & Gallagher (1988) は、6歳から11歳の双生児にMYTHを実施して遺伝説と環境説の当否を検討しているが、ここでは遺伝説を支持する結果が得られている。

さて、以上のうち結果の分析法に問題のあるMatthews & Krantz (1976) の研究を除いた4つの研究結果の中で、成人を対象とした3つの研究 (Carmelli et al., 1988; Matthews et al., 1984; Rahe, et al., 1978) をみてみよう。これらの研究では、すべての結果が一致するわけではないが、タイプAとして測定された結果に遺伝の影響のみられた部分と、逆に、環境からの影響が確認された部分の双方が存在することが見いだされた。Carmelli et al. (1988) は、一般にタイプAのものとしてされる行動や心理的な特徴のうち、遺伝性の高いものと低いものの双方があり、気質に属するものは遺伝性が強いのではないかと結論を下している。このCarmelli et al. (1988) の見解に加え、先に(2) - 2, および、(3) で取り上げたSteinberg (1986; 1988) の児童のタイプAは潜在的な気質として存在するという説、そして、Meinnger et al. (1988) の児童を対象とした双生児研究でタイプAの遺伝性の強さがみられたという結果を併せて考えると、以下のようなことがいえるかもしれない。すなわち、タイプAのうち、その基底となる気質的な部分は遺伝性が強く、幼児期、児童期などにおいてはこの気質の部分が主にタイプAとして扱われるが、成人期に達した後は気質に加え環境の影響から獲得された様々な行動がタイプAの特徴として加わってくるという考え方である。いわば、遺伝と環境の加算説である。ちなみに、遺伝と環境のそれぞれが寄与する比率であるが、Pedersen, Lichtenstein, Plomin, DeFaire, McClearn, & Matthews (1989) は、タイプAの得点の全分散の約60%は環境要因から説明可能で、遺伝要因によって説明される部分は20%程度ではないかと推定している。もしこの結果が一般化できるならば、遺伝の影響はそれほど強くなさそうである。

## 2. タイプAの発達に関する理論

さて、1. においてタイプAがある程度は環境の影響によって発達する可能性があることを確認したが、では、タイプAの発達に関する理論にはどのようなものがあるのだろうか。残念ながら、子どものタイプAの発達に関する包括的な理論はこれまでのところ提起されていない\*\*\*。Price (1982) のモデルはBandura (1977) の社会的学習理論 (social learning theory) の枠組みを用いて理論化したもので、タイプAが学習される過程を包括的に扱ったモデルとして唯一のものといえる。しかし、Priceはこのモデルを必ずしも子どもに適用することを意図していない。

また、Thoresen & Pattillo (1988) は、タイプAの発達を考える理論的枠組みとして、J. Bowlbyの愛着理論 (attachment theory) やH. Kohutらによる自己愛パーソナリティ (narcissistic personality) の発達理論などが利用できるとして、これらの理論の概略を紹介しながらタイプAが発達する過程との対比をしている。しかし、これはあくまで思弁的な考察にとどまるもので、実証的な研究との間にはかなり距離がある。

こうした中であって、ある程度のデータの蓄積があり、タイプAの発達に関してわずかながらも仮説を提起できる状態にあるのが、両親が子どもに与える影響を中心に分析したタイプAの発達の研究である。次にそれらを紹介する。

### 3. タイプAの発達と両親の影響

タイプAの発達のある部分が環境の影響によるならば、その環境要因の1つである家庭、とくに両親からの影響に焦点をあてようというのが、これらの研究の主旨である。さて、一連の研究では両親の影響がタイプAの発達に及ぼす仕組みとしてさまざまな見解を述べているが、それらを大づかみにまとめるとほぼ以下の2説に収斂する。すなわち、①両親のタイプA的な行動を子どもがモデリングによって学習すると考える説、②両親の養育態度が子どもにタイプA的な反応を引き起こし、それが、安定的な行動傾向として獲得されることでタイプAが形成されるという説である。以下、本稿では仮に前者を“モデリング説”，後者を“養育態度説”と称する。

この両説は、どちらも体系的に組み立てられたものではなく、個々の研究においてその結果を解釈する際に適宜取り上げられている。従って、両者は決して対立する説ではない。場合によっては、同一研究内においても2つの説が同時に適用可能であると述べられていることもある（たとえば、Weidner, Sexton, Matarazzo, Pereira, & Friend, 1988など）。

まず、①の“モデリング説”であるが、Blaney, Blaney, & Diamond (1989), Bortner, et al. (1970), Matthews, Stoney, Rakaczky, & Jamison (1986), Raikkonen, Keltikangas-Jarvinen, & Pietikainen (1991), Weidner, et al. (1988)などがその適用の可能性を述べている。

たとえば、Matthews, Stoney, Rakaczky, & Jamison (1986)は、児童にはMYTHを、両親にはFramingham Type A Scale (Haynes, Levine, Scotch, Feinleib, & Kannel, 1978)をそれぞれ実施した。その結果、子どものうち男子のタイプAと両親のタイプAの間に有意な相関を認めた。Matthews, et al. (1986)は、この結果を解釈して、タイプAの特徴は一般にステレオタイプに男性的な行動とされているものが多いため、男子は日常生活のなかでタイプAである両親の行動を観察学習するのではないかと述べている。

モデリング説を唱える諸研究は、ふつう両親と子どもの双方にタイプAの測定尺度を実施し有意な相関が得られたことをその根拠にしているが、具体的な学習が生起する過程についてはこのMatthews, et al. (1986)の研究のように推測として述べられるにとどまっている。また、そもそも、両親と子どものタイプA得点の相関係数が有意になるということだけでは、遺伝の影響と観察学習の効果が完全には分離できない。このようにモデリング説は必ずしも十分に実証が行われている訳ではなく、観察学習の過程をより明確に抽出できる方法によって吟味される必要がある。

つぎに、②の“養育態度説”についてみてみよう。この説は、Blaney, et al. (1989), Essau & Coates (1988), Harralson, & Lawler (1992), Kliewer & Weidner (1987), McCranie, & Simpson

(1986), 大芦・岡崎・山崎 (1994; 1995; 1996), Raikkonen Keltikangas-Jarvinen (1992), Weinder, et al. (1988), Woodall & Matthews (1989), Yamasaki (1990; 1994) などによって主張されている。

この養育態度説の骨子を、細部の異同はあえて無視して述べれば、おおよそ以下のようなもの。すなわち、両親が子どもに対して非支持的で、拒否的な態度をとり、権威主義的な支配を行い、また、子どもに対して過剰な達成目標を強いることで、子どもは自分を無力で無価値なものとする。と同時に、子どもは、両親や他者に対して潜在的な怒りや敵意をもつようになる。さらに、子どもは自分の価値を両親や他者に誇示することでみじめな自分の状況の改善を図ろうとし、競争的で過剰な達成行動をとるようになる。そして、これらの行動がタイプAの発達につながるというのである。研究の多くは、両親あるいは子どもに親子関係を問う質問紙を実施することで両親の非支持的、権威主義的といった養育態度を測定し、その得点と子どものタイプA得点の間に相関がみられれば、仮説が証明できたとしている。

ところが、この養育態度説をとる研究は、個々に検討するとそれぞれに微妙な主張の差異がある。前段で紹介した説はWoodall & Matthews (1989) の記述にはほぼ沿ったもので、McCranie, & Simpson (1986) などもこれに近い説を展開している。一方、Yamasaki (1990; 1994) などは、タイプAを発達させる子どもの両親は自分のことだけで精一杯で育児に対して関心が薄いために、子どもは自分の価値を両親に認めさせる目的でタイプA的な行動にでるのではないかと考えており、強調する力点がやや異なっている。また、Kliwer & Weidner (1987) やEssau & Coates (1988) などは、両親が子どもに対して高い達成目標を求めることをタイプAの発達の主要因においている。さらに、Blaney, et al. (1989) や大芦他 (1994) などは、両親が達成志向的であると同時に子どもに対して過保護であることも条件に挙げている。この過保護は、Yamasakiの主張する無関心などとは明らかに矛盾する概念である。こうした、細部の不一致が生じてくる理由は、おそらく、それぞれの研究が用いる尺度、対象者の発達段階、社会経済的階級などが異なっているからであり、それらを考慮すればそもそも諸結果が完全に一致することの方が難しいかもしれない。にもかかわらず、これらの説が一応共通のものとして一まとまりに論じることができるのは、タイプAを発達させる両親の養育態度が、諸研究の微妙な差にも関わらず子どもにとって何らかの意味で否定的な傾向をもつからである。なお、Blaney, et al. (1989) は、タイプAを発達させる親の養育態度が過保護な側面と拒否的、非支持的な側面という矛盾した面をもつ原因を、両親のアンビバレントな態度によるためと推測している。このアンビバレントな態度が子どもにとって否定的な影響を与えるのはいうまでもない。

しかし、両親の否定的な養育態度が子どものタイプAを発達させるという見解をもって結論とするのは、あまりに漠然とした感が拭えない。なぜなら、タイプAに限らず環境からの影響を重視する精神障害や心理的不適応の多くは、その病因論の中に何らかの意味で両親からの不適切な影響を考慮しているからである。むしろ、否定的な両親の養育態度がどのような状況の中で生起するのかその背後にある要因を探り、その要因から否定的な養育態度の意味を考えて

ゆくことが重要であろう。大声 (1995), 大声他 (1996) は, タイプAを発達させる養育態度には日本をはじめとした先進諸国に特有の達成志向的, 競争志向的な価値観が反映しているのではないかと指摘している。大声 (1995), 大声他 (1996) は, その1つとして学歴を重視し有名大学を志向する価値観を取り上げ, タイプAを発達させるような両親の養育態度との関連を検討している。今後は, こうした試みがより多く行われることが望まれる。

#### 4. 両親の影響の性差

タイプAの発達を両親の影響から検討した一連の研究に内在する問題として, 無視できないもう一つの問題が性差である。すなわち, ①両親のうち父親と母親のどちらが子どものタイプAの発達に大きな影響を与えるのかという問題と, ②子どもの側で両親からより大きな影響を受けるのは男子なのか女子なのかという問題の2点である。

まず, ①についてみれば, 母親の影響が大きいとみるのが, Matthews & Krantz (1976), 大声他 (1994), Sweda, Sines, Lauer, & Clarke (1986), などであり, 逆に父親の影響を重視するのがLundberg, Rasch, & Westermarck (1990), Weinder, et al. (1988) などである。また, Forgays & Forgays (1991) や大声他 (1995) などは父母の双方の影響を認めている。

次に, ②についてみれば, Kliewer & Weidner (1987), Matthews, Stoney, Rakaczky, & Jamison (1986), Weinder, et al. (1988), Yamasaki (1990; 1994) など, 両親からの影響をうけるのは主として男子のみという見解をとる研究者も多いが, Matthews & Krantz (1976), 大声他 (1995) のように男子のみならず女子も両親の影響を受けタイプAを発達させると報告する者もいる。ただ, 女子のみが両親の影響をうけるとした研究だけはほとんど見あたらない。

さて, こうした親と子どもの性別による結果の差をどのように理解すればよいのだろうか。Bracke (1986) は, タイプAの発達と両親の態度の関係を分析し, 父親は主として観察学習のモデルとして影響を与えるが, 母親はむしろ達成を促すなど子どもに直接的な影響を与えているのではないかと指摘している。この見解は, 確かにモデリング説を支持する結果が父-男子の間での観察学習を想定していること (たとえば, Weidner, et al., 1988など) とは符合するが, 父親が女子に影響を与えている結果 (たとえば, 大声・岡崎・山崎, 1995; 1996) などとは必ずしも整合性がない。また, Raikkonen (1993) は, 父母の別, および, 子どもの男女の別に組み合わせを作り, さらに, タイプAをいくつかの次元に分けて体系的に分析を試みたが, 結果は複雑になるだけで, 統一的な見解は引き出せなかった。

このようにタイプAの発達の性差については, 現在のところ, 確定的な見解は出されていない。これまでの諸研究の結果をみてほぼ確定できる事実, 一般に男子の方が女子より両親から受ける影響が大きいといえることくらいである。

先にも述べたが, 一連の研究で使用している尺度や対象者の発達段階, 人種, 属する文化などの違いが大きいということは, やはり, ここでも統一的理解を困難なものにしているのだろう。さらに, 一般に育児やしつけの様式には文化によってかなりの差があるとされている (渡

辺, 1995) ことも考慮すれば, 結果の不一致を単に方法の不統一に由来するものとして片付けるわけにはいかない面もあり, 問題は複雑である。

### (7) おわりに—子どものタイプAの研究と教育心理学

本稿では子どものタイプAに関する諸研究を概観し, それらを研究の現状の中で位置づけてみた。その結果, 万全とはいえないものの, 子どものタイプAの研究が1つの領域としてその意義をもちうることを確認した。その意義とは, CHDの危険因子としてのタイプAの研究を, 幼児や児童, あるいは, 青年を対象として実施する意味があるということである。つまり, 大人になって健康を損ねるような行動様式の源流が幼児や児童, あるいは, 青年の時期にまでさかのぼれるので, それらの時期にタイプAが形成される過程を研究することで何か得るものがあるはずだということである。その得るものとは何かといえば, やがて, タイプAの形成過程が解明されれば, タイプAの早期予防の策が打てるという可能性であり, これは, 結果的には成人以降に健康を損なうおそれを未然に低めることにもなる。

タイプAの早期予防策とは何か, 現段階でははっきりいえないが, おそらく本稿の冒頭で述べたタイプAの諸特徴, つまり, 時間に焦り, 競争的, 達成志向的で, 時に, 短気で攻撃的になることもあるような行動特性を発達させないようにすることであろう。

ところが, これらのうち攻撃性などはともかく, 時間を有効に使い, 達成志向的であることなどは, 現代社会ではむしろ望ましいこととされている(橋本, 1990)。そして, 教育場面においても高い達成を成し遂げることは望ましいこととされ, 達成動機づけ(achievement motivation)といわれる分野でそのための研究が数多く行われてきた(詳細は, 宮本, 1979などを参照)。もちろん, 達成動機づけの研究が高揚をめざしている達成動機づけとタイプA者が見せる達成に対する強い欲求は全く同一のものとはいえない。しかし, タイプAを示す児童が各種の達成テスト(achievement Test)において高得点を示す傾向を報告する結果(Bachman, Sines, Watson, Lauer, & Clarke, 1986; Matthews, Stoney, Rakaczky, & Jamison, 1986)や, 知能検査でも高いIQを示すという結果(Stamps, & Clark, 1987)を考えれば, 両者に共通する部分があることは否定できない。

おそらく, 子どものタイプAの研究が現代の教育心理学の中で何らかの積極的な役割を果たすことがあるとすれば, この点が1つのポイントになるはずである。つまり, 子どものタイプAの研究は, これまでもつぱら子どもが達成を高めることに目を注いでいた教育心理学者に, 同じ達成という特徴をもちながらもそれが原因で将来重大な健康被害を招いてしまう状態があることを示したからである。このことは, 激しい受験戦争で知られ, さらに近年その低年齢化が目立ってきた現代のわが国のような社会においては, もっと注目されてよいはずである。

ただ, これは何も新しい主張ではなく, すでにPrice(1982)が10年以上前にアメリカの教育制度に関連して同様の指摘をしている。しかし, タイプAを発達させる要因の分析は, 現在のところ本稿の(5) - 3でみたように親子関係に視点を置いたアプローチが主流で, 子どもの

周囲の教育環境がタイプAの発達に及ぼす影響を実証的に扱った研究は内外を問わずほとんど行われてこなかった。

したがって、現状では、将来そうした研究が行われることを希望する以外にないのだが、それがなされてこそ、この領域の研究が教育心理学の一分野として今以上にその本分を発揮するようになるはずである。

#### 引用文献

- Bachman, E.E., Sines, J.O., Watson, J.A., Lauer, R.M., & Clarke, W.R. 1986 The Relations between type A behavior, clinically relevant behavior, academic achievement, and IQ in children. *Journal of Personality Assessment*, 50, 186-192.
- Bandura, A. 1977 *Social learning theory*. Englewood Cliff, N.J.:Printice-Hall.
- Bergman, L.R., & Magnusson, D. 1986 Type A behavior: A longitudinal study from childhood to adulthood. *Psychosomatic Medicine*, 48, 134-142.
- Blaney, N.T., Blaney, P.H., & Diamond, E. 1989 Intrafamilial patterns reported by young type A versus type B males and their parents. *Behavioral Medicine*, 15, 161-166.
- Bortner, R.W., Rosenman, R.H., & Friedman, M. 1970 Familial similarity in pattern A behavior: Fathers and sons. *Journal of Chronic Disease*, 23, 39-43.
- Bracke, P.E. 1986 *Parental child-rearing practices and the development of type A behavior in children*. Unpublished doctoral dissertation, Stanford University.
- Brown, M.S., & Tanner, C. 1988 Type A behavior and cardiovascular responsivity in preschoolers. *Nursing Research*, 37, 152-155.
- Brown, M.S., & Tanner, C. 1990 Measurement of type A behavior in preschoolers. *Nursing Research*, 39, 207-211.
- Butensky, A., Faralli, V., Heebner, D., & Waldron, I. 1976 Elements of the coronary prone behavior pattern children and teen-agers. *Journal of Psychosomatic Research*, 20, 439-444.
- Carmelli, D., Rosenman, R., Chesney, M., Fabsitz, R., Lee, M., & Borhani, N., 1988 Genetic heritability and shared environmental influences of type A measures in the NHLBI twin study. *American Journal of Epidemiology*, 127, 1041-1052.
- Corrigan, S.A., & Moskowitz, D.S. 1983 Type A behavior in preschool children: Construct validation evidence for the MYTH. *Child Development*, 54, 1513-1521.
- Essau, C.A., & Coates, M.B. 1988 Effects of parental styles on anxiety and type A behavior pattern. *Perceptual and Motor Skills*, 67, 333-334.
- Friedman, M., & Rosenman, R. H. 1974 *Type A behavior and your heart*. Ballantine Books Ed. New York: Random House.
- Forgays, D.K., & Forgays, D.G. 1991 Type A behavior within families: Parents and older adolescent children. *Journal of Behavioral Medicine*, 14, 325-339.
- Glass, D.C. 1977 *Behavior patterns, stress, and coronary disease*. Hillsdale, N. J.:Erlbaum.
- Harbin, T.J. 1989 The relationship between the type A behavior pattern and physiological responsivity: A quantitative review. *Psychophysiology*, 26, 110-119.
- Harralson, T.L., & Lawler, K.A. 1992 The relationship of parenting styles and social competency to type A behavior in children. *Journal of Psychosomatic Research*, 36, 625-634.
- 橋本 幸 1990 健康心理学とタイプA行動 呼吸と循環, 38, 1185-1191.
- Haynes, S.G., Levine, S., Scotch, N., Feinleib, M., & Kannel, W.B. 1978 The relationship of psychosocial factors to coronary heart disease in the Framingham study: I. Methods and risk factors. *American Journal of Epidemiology*, 107, 362-383.

- Jenkins, C.D., Zyzanski, S.J., & Rosenman, R.H. 1971 Progress toward validation of a computer-scored test for the type A coronary-prone behavior pattern. *Psychosomatic Medicine*, 33, 193-202.
- Keltikangas-Jarvinen, L. 1990 Continuity of type A behavior during childhood, preadolescence, and adolescence. *Journal of Youth and Adolescence*, 19, 221-232.
- 木村一博 1995 内科の病氣とタイプA 山崎勝之(編) タイプAからみた世界一ストレスの知られざる姿—現代のエスプリ vol. 337 至文堂 Pp. 43-53.
- Kliewer, W., & Weidner, G. 1987 Type A behavior and aspirations: A study of parents' and children's goal setting. *Developmental Psychology*, 23, 204-209.
- Lawler, K.A., Allen, M.T., Critcher, E.C., & Standard, B.A. 1981 The relationship of physiological responses to the coronary-prone behavior pattern in children. *Journal of Behavioral Medicine*, 4, 203-216.
- Lundberg, U. 1980 type A behavior and its relation to personality variables in Swedish male and female university students. *Scandinavian Journal of Psychology*, 21, 133-138.
- Lundberg, U. 1983 Note on type A behavior and cardiovascular responses to challenge in 3-6 yr. old children. *Journal of Psychosomatic Research*, 27, 39-42.
- Lundberg, U., Rasch, B., & Westermark, O. 1990 Familial similarity in type A behaviour and physiological measurements as related to sex. *Scandinavian Journal of Psychology*, 31, 34-41.
- Lundberg, U., Rasch, B., Westermark, O. 1991 Physiological reactivity and type A behavior in preschool children: A longitudinal study. *Behavioral Medicine*, 17, 149-157.
- McCann, B.S., & Matthews, K.A. 1988 Influences of potential for hostility, type A behavior, and parental history of hypertension on adolescents' cardiovascular responses during stress. *Psychophysiology*, 25, 503-511.
- McCranie, E.W., & Simpson, M.E. 1986 Parental child-rearing antecedents of type A behavior. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 12, 493-501.
- MacEvoy, B., Lambert, W.W., Karlberg, P., Karlberg, J., Klackenberg-Larsson, I., & Klackenberg, G. 1988 Early affective antecedents of adults type A behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 54, 108-116.
- 前田 聡 1990 虚血性心疾患のリスクファクターとしてのタイプA行動パターンタイプA Vol. 1 星和書店 Pp.31-36.
- Matthews, K.A. 1979 Efforts to control by children and adults with the type A coronary-prone behavior pattern. *Child Development*, 50, 842-847.
- Matthews, K.A., & Angulo, J. 1980 Measurement of the type A behavior pattern in children: Assessment of children's competitiveness, impatience-anger, and aggression. *Child Development*, 51, 465-475.
- Matthews, K.A., & Jennings, J.R. 1984 Cardiovascular responses of boys exhibiting the type A behavior pattern. *Psychosomatic Medicine*, 46, 484-497.
- Matthews, K.A., & Krantz, D.S. 1976 Resemblances of twins and their parents in pattern A behavior. *Psychosomatic Medicine*, 38, 140-144.
- Matthews, K.A., Manuck, S.B., & Saab, P.G. 1986 Cardiovascular responses of adolescents during a naturally occurring stressor and their behavioral and psychophysiological predictors. *Psychophysiology*, 23, 198-209.
- Matthews, K.A., Rosenman, R.H., Dembroski, T.M., Harris, E.L., & MacDougall, J.M. 1984 Familial resemblance in components of the type A behavior pattern: A reanalysis of the California type A twin study. *Psychosomatic Medicine*, 46, 512-522.
- Matthews, K.A., Stoney, C.M., Rakaczky, C.J., & Jamison, W. 1986 Family characteristics and school achievements of type A children. *Health Psychology*, 5, 453-467.
- Matthews, K.A., & Volkin, J.I. 1981 Efforts to excel and the type A behavior pattern in children. *Child Development*, 52, 1283-1289.
- Meininger, J.C., Hayman, L.L., Coates, P.M., & Gallagher, P. 1988 Genetics or environment? Type A behavior and cardiovascular risk factors in twin children. *Nursing Research*, 37, 341-346.

- 宮本美沙子(編著) 1979 達成動機の心理学 金子書房
- Murray, D.M., Blake, S.M., Prineas, R., & Gillum, R.F. 1985 Cardiovascular responses in type A children during a cognitive challenge. *Journal of Behavioral Medicine*, 8, 377-395.
- Nay, R.E., & Wagner, M.K. 1987 The assessment of type A behavior in children and adolescents: An overview. *Journal of Psychopathology and Behavioral Assessment*, 9, 1-12.
- 大声 治 1995 タイプAの発達と両親の影響—両親の教育熱, 学歴志向が子どものタイプAの発達に影響するか— 山崎勝之(編) タイプAからみた世界—ストレスの知られざる姿—現代のエスプリ Vol. 337 至文堂 Pp. 186-193.
- 大声 治・岡崎奈美子・山崎久美子 1994 虚血性心疾患の危険因子の形成に及ぼす父母の養育態度の影響 日本発達心理学会第5回大会発表論文集, 224.
- 大声 治・岡崎奈美子・山崎久美子 1995 タイプA行動パターンの形成に及ぼす両親の進学競争志向の影響(2)—モデルの再検討と男女の違い— 日本発達心理学会第6回大会発表論文集, 154.
- 大声 治・岡崎奈美子・山崎久美子 1996 タイプA行動パターンの発達に及ぼす両親の学歴志向および養育態度の影響 発達心理学研究, 7, 41-51.
- Pedersen, N.L., Lichtenstein, P., Plomin, R., DeFaire, U., McClearn, G.E., & Matthews, K.A. 1989 Genetic and environmental influences for type A-like measures and related traits: A study of twins reared apart and twins reared together. *Psychosomatic Medicine*, 51, 428-440.
- Price, V.N. 1982 *Type A behavior pattern: A model for research and practice*. New York: Academic Press.
- Rahe, R.H., Havig, L., & Rosenman, R.H. 1978 Heritability of type A behavior. *Psychosomatic Medicine*, 40, 478-486.
- Raikkonen, K. 1993 Predictive associations between type A behavior of parents and their children: A 6-year follow-up. *Journal of Genetic Psychology*, 154, 315-328.
- Raikkonen, K., & Keltikangas-Jarvinen, L. 1992 Childhood hyperactivity and the mother-child relationship as predictors of risk type A behavior in adolescence: A six year follow-up. *Personality and Individual Differences*, 13, 321-327.
- Raikkonen, K., Keltikangas-Jarvinen, L., & Pietikainen, M. 1991 Type A behavior and its determinants in children, adolescents and young adults with and without parental coronary heart disease: A case-control study. *Journal of Psychosomatic Research*, 35, 273-280.
- Rosenman, R.H. 1978 The interview method of assessment of the coronary-prone behavior pattern. In T.M. Dembroski, S.M. Weiss, J.L. Shields, S.G. Haynes, & M. Feinleib(Eds.), *Coronary-prone-behavior*. New York: Springer-Verlag. p.55-69.
- Sharpley, C.F., & James A.M., & Mavroudis, A. 1993 Developmental and gender differences in the relationship of behavior pattern to heart rate reactivity between two teenage samples. *Journal of Clinical Psychology*, 49, 764-773.
- Siegel, J.M., Matthews, K.A., & Leitch, C.J. 1983 Blood pressure variability and the type A behavior pattern in adolescence. *Journal of Psychosomatic Research*, 27, 265-272.
- Southard, D.R., Coates, T.J., Kolodner, K., Parker, F.C., Padgett, N.E., & Kennedy, H.L. 1986 Relationship between mood and blood pressure in the natural environment: An adolescent population. *Health Psychology*, 5, 469-480.
- Spiga, R. 1986 Social interaction and cardiovascular response of boys exhibiting the coronary-prone behavior pattern. *Journal of Pediatric Psychology*, 11, 59-69.
- Stamps, L.E. 1988 The type A behavior pattern in children: Relationships with performance on speed oriented tasks. *Journal of Genetic Psychology*, 149, 53-60.
- Stamps, L.E., & Clark, C.L.C. 1987 Relationships between the type A behavior pattern and intelligence in children. *Journal of Genetic Psychology*, 148, 529-531.
- Steinberg, L. 1985 Early temperamental antecedents of adult type A behaviors. *Developmental Psychology*, 21, 1171-1180.
- Steinberg, L. 1986 Stability(and instability) of type A behavior from childhood to young adulthood. *Developmental Psychology*, 22, 393-402.



- Steinberg, L. 1988 Stability of type A behavior from early childhood to young adulthood. In P.B. Baltes, D.L. Featherman, & R.M. Lerner (Eds.), *Life-Span Development and Behavior*, Vol. 8. Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum Associates. Pp. 129-161.
- Sweda, M.G., Sines, J.O., Lauer, R.M., & Clarke, W.R. 1986 Familial aggregation of type A behavior. *Journal of Behavioral Medicine*, 9, 23-32.
- Thoresen, C.E., & Pattillo, J.R. 1988 Exploring the type A behavior pattern in children and adolescents. In B.K. Houston, & C.R. Snyder(Eds.), *Type A behavior pattern: Research, theory, and intervention*. New York: John Wiley & Sons. Pp.98-145.
- Vega-Lahr, N., & Field, T.M. 1986 Type A behavior in preschool children. *Child Development*, 57, 1333-1348.
- Visintainer, P.F., & Matthews, K.A. 1987 Stability of overt type A behavior in children: Results form a two- and five-year longitudinal study. *Child Development*, 58, 1586-1591.
- 渡辺恵子 1995 親の性別しつけ 柏木恵子(編) 女性の発達 現代のエスプリ vol. 331 至文堂 Pp. 35-56.
- Weidner, G., & Matthews, K.A. 1978 Reported physical symptoms elicited by unpredictable events and the type A coronary behavior pattern. *Journal of Personality and Social Psychology*, 36, 1213-1220.
- Weidner, G., Sexton, G., Matarazzo, J.D., Pereira, C., & Friend, R. 1988 Type A behavior in children, adolescents, and their parents. *Developmental Psychology*, 24, 118-121.
- Woodall, K.L., & Matthews, K.A. 1989 Familial environment associated with type A behavior and psychophysiological responses to stress in children. *Health Psychology*, 8, 403-426.
- Yamasaki, Katsuyuki 1990 Parental child-rearing attitudes associated with type A behaviors in children. *Psychological Reports*, 67, 235-239.
- Yamasaki, Katsuyuki 1994 Similarities in type A behavior between young children and their parents in Japan. *Psychological Reports*, 74, 347-350.

#### 脚注

\* MYTHは、17項目、7段階の他者評定式の尺度でMatthews, & Angulo (1980) によって開発された。子どものタイプAの測定尺度としては、もっとも著名なものである。MYTHは17項目の合計点の高得点の被験者をタイプAとするが、分類の基準となる得点は特に定められていなく、平均値より高い者をタイプA者として扱っていることが多い。

なお、子どものタイプAの測定法に関する諸問題については、Nay, & Wagner (1987) の展望を参照されたい。

\*\* 一般にタイプAでないことをさしてタイプBと称するので本稿でもそれに従う。

\*\*\* 最近、我が国の山崎勝之が子どものタイプAの発達に関する包括的な仮説を提起したので付記しておきたい。なお、詳細は、山崎勝之 1995 タイプA性格の形成過程. 心理学評論, 38, 1-24. を参照。

## Studies on Type A Behavior Pattern in Children and Adolescents

Osamu OASHI

*Faculty of College of Liberal Arts and Science,*

*Kurashiki University of Science and the Arts,*

*2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712, Japan*

(Received September 30, 1996)

Type A behavior pattern (type A) is shown to be a predictor of coronary heart disease. Current interest has focused on development of Type A. Although numerous developmental studies of type A has been executed in children, and adolescents, it is not well documented the validity of studying type A in these subjects.

In this regard, the present article critically evaluates what is known about type A in children, and adolescents. Main topics are as follows.

- (1) To examine the assumption that type A can be observed in children, and adolescents, and that is analogous to adult type A.
- (2) To evaluate the continuity of type A from early childhood to adulthood.
- (3) To investigate the relationship between type A and cardiovascular responsivity.
- (4) To summarize the studies of origin and development of type A.

Finally the implications of the studies of type A in children, and adolescents are discussed in terms of educational perspectives.

Key words : type A behavior, preschoolers, children, adolescents, development.